

児童文学として再話された『日本神話』の戦前と戦後

―大木雄二の作品比較を一例として―

市瀬 雅之

はじめに

『古事記』『日本書紀』『風土記』等に記された日本の神話が、児童文学として再話された歴史を辿ると、所謂太平洋戦争の前と後では、解釈や表現に変化が認められる。作者が同じ場合、時代と社会が再話に与えた影響を知ることができよう。

① 大木雄二『日本神話』金の星社 一九三八年〔昭和十三年〕十月

② 大木雄二『世界名作童話全集第三二巻』日本神話 いなばの白うさぎ』

講談社 一九五一年〔昭和二十六年〕十二月。

③ 鴨下晁湖絵 大木雄二文 講談社の絵本『いなばの白兔』 大日本

雄弁会講談社 一九五四年〔昭和二十九年〕八月。

本稿では、右に掲出した大木雄二(一)の作品の中から、主に①と②を比較することで、時代や社会の変化と作品との関わりを知る一助としたい。

一、執筆姿勢の比較

はじめに大木前掲①書の「はしがき」を読み、一九三八年〔昭和十三年〕時における作者の執筆姿勢を確認しておく。冒頭は次のように記されている。

世界中に、日本ほど、よい国はありません。日本ほど、りっぱな国はどこにもありません。歴史を勉強すると、そのわけがよくわかります。

天照大神は、高天原においでになりましたが、

「豊葦原瑞穂国は、わが子孫の君たるべき地なり。」

と、おつしやつて、瓊瓊杵尊を、日本にお下しになりました。ですから、日本は神の国なのです。

そのころ、日本には大ぜいの神様がいらつしやいました。そしていろいろなことが起つてをりましたが、大国主命をはじめ、よい神様は、いつしやうけんめいに、日本をひらいて、すみよい国になさうとなさいました。

わるいことをしたものは、かならずほろびました。よいことをしたものは、きつと栄えました。ですから、日本の国は、よいことをしたのばかりがのこつて、今日までつづいてきた国であります。

日本が国単位で語られはじめるところに大きな特徴を認めることができる。世界の中でも、日本のように「りっぱな国」は他にないと讃えている。その根拠が「天照大神」を頂点とする日本の神話に求められ、事実と捉えられ、「神の国」と位置づけられている。その国づくりは「よい」と「わるい」に大別され、「よいことをしたものばかりがのこつて、今日までつづいてきた」ことを「歴史」とする。続いて、

私どもも、よいことをしませう。人のため、国のためになることをしませう。この心が日本精神であります。日本人が一人のこらず、日本精神をもてば、日本は世界一強い、世界一よい国になることができます。

この本を書くについては『日本書紀』といふ本や『古事記』といふ本や『風土記』といふ本を読んで、そのなかから、面白い、ためになるお話をとりました。三つとも、みんな日本の昔のことを書いた本ばかりです。これらの本のなかには、もつともつと、みなさんにお知らせしたいお話がたくさんありますが、それは『日本建国物語』といふ、べつな

本にして出すことになりましたから、しばらくおまち下さい。この『日本神話』をお読みになった方は、かならず読んでいただきたいと思ひます。

とある。「よいこと」とは、人のため、国ためになることをすることだとする。それを日本精神として持つことで、世界一強く、よい国になるとある。執筆にあたっては、『日本書紀』をはじめ『古事記』と『風土記』から、面白くためになる話を選択したという。それらを組み合わせた神話が、『歴史』として日本の「建国」に結びつけられている。

ここに、他国との戦争を肯定したり、支持するに至らないところが注目されよう。

大木雄二「メンコの人気者」(2)は、前掲①書を執筆した当時を、(前略)そのころ児童図書には、「文部省推薦」という制度が設けられていた。ところが事実はあべこべになって、思いもうけぬおしかりを受けてしまった。叱ったのは出版会である。理由は皇室のとり扱いについて注意がたりないというのだった。神武天皇の前身日本磐余彦命の生母豊玉姫が、鰐だったという記述は、皇室の尊厳を傷つける。ほかによい表現はなかったものか。というようなことだった。しかし『古事記』にも『日本書紀』にも、そう書いてあるのである。そうした伝説こそおもしろいので、けっして皇室の尊厳に関係しない、とわたしは信じていたが、それも通らない理屈であった。泣く子と地頭には勝てない。長いものに巻かれないことには、とんだ災難の振りかかる時勢に、いのちがけで争う気は起こらなかった。

と回想している。「そうした伝説こそおもしろい」との表現は、前掲①書の「はしがき」が「面白い、ためになるお話をとりました」と記す内容と整合しよう。神話を用いて、日本が「神の国」であるという(歴史)を記し、正しく強い国であることを求める時代を反映させてはいるが、文学的関心に

基づいて執筆していた側面を捉えることができる。

次いで大木前掲②書に、一九五一年(昭和二十六年)時における作者の執筆姿勢を確認しておく。冒頭には、「いちばんむかしのおはなし」として、次のように記されている。

この本の中のお話は、日本で、いちばんふるいお話です。まだ文字ができてなかったころ、こんなお話があったというのは、おもしろいことではありませんか。

おじいさんおばあさんから、おとうさんおかあさんへ、それから子どもへと、口から耳へつたわつたのが、この本のお話です。「古事記」という、日本で、いちばんはじめにでた本に、このお話はのっているのです。もっとたくさんのお話があります。みなさんも大きくなった、「古事記」をよんでください。むかしむかしの、わたくしたちのご先祖の日本人が、どんなことをかんがえていたのかがわかりましょう。

さあ、いちばんむかしの日本のお話をよみましょう。つぎのページをあけてください。

『古事記』のみを再話し、「日本でいちばんふるいお話」と位置づけられている。末尾の「『いなばの白うさぎ』について」が、更に詳細を記す。少し長いので、便宜的に分割しながら読み進める。

この本にはいつている「いなばの白うさぎ」ほか七編の物語は、すべて「古事記」の中から取材し、それをわたし流に童話として書きなおしたものであります。これまでに、「古事記こども版」とも名づくべき本は、かなり数多く出ていますので、いままたここに新しく一冊を出すについては、若干のわたしとしての考えもあつたわけでありす。それは「古事記」を見る見方の角度と、題材の取上げ方についてであります。わたしは、あくまでもこれを伝承説話としてあつかい、その中から、日本人のものの考え方というようなものをさぐろうとしました。そして

て、たどりついたところは、おおらかな、素朴な人間世界であり、ヒューマニズムのみちた理想社会であったように思います。ただ、作品の一つ一つが、わたしのこの言葉を証拠だてることができたかどうかは、むしろわたしのほうで教えていただきたいところでもあります。

傍線で示したように、「わたし」の理解や志向が中心となつて記述されているところに大きな特徴が認められる。『古事記』を「わたし流に童話として書きなおしたもの」としている。「わたし流」の再話には、大木前掲①書が記した建国に続く歴史認識は示されていない。新しい一冊を刊行するにあたり、「『古事記』を見る見方の角度」と「題材の取り上げ方」を変化させたことを明らかにしている。具体的には、『古事記』を《伝承説話》として読むことが提示される。『古事記』から、「日本人のものの考え方」「素朴な人間世界」「ヒューマニズムのみちた理想社会」を読み解くことができるとする。次いで、

「古事記」は「日本書紀」とならんで、わが国古典中の古典でありまして、元明天皇の和銅四年（西暦七一年）、博士太朝臣安万侶の筆述したものと いわれます。もともと、それよりさらにさかのぼって、天武天皇の代に、諸家の伝誦旧記を整理したことがありましたが、そのさい博覧強記をうたわれた稗田阿礼というものの誦み習わしたものが、そのもととなつていられるといわれています。まだ文字が自由でなかったころですから、古いことは、口から口へ伝えられていたわけであります。「古事記」はそのようにしてできたもので、なにぶんにも漢字の音訓と、漢字の語句とをかりて、国語をうつすというありさまであったため、文章はきわめて読みにくく、難解なところがすくなくありません。これがのちのちまで「古事記」について、国学者のあいだに、さまざまな議論と研究が行われたゆえんでもありません。

と、『古事記』の成り立ちが記されている。中でも『古事記』が、漢字のみ

で記されているところに難解さを認め、「文字が自由でなかったころ」のこととして、「古いことは、口から口へと伝えられていた」ことに着目している。

『古事記』（3）を記す難しきは、太安万侶が序文に、

然れども、上古の時は、言と意と並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於ては即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に速ばず。全く音を以て連ねたるは、事の趣更に長し。是を以て、今、或るは一句の中に、音と訓を交へ用あつ。或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ。即ち、辞の理の見え匡きは、注を以て明し、意の況の解り易きは、更に注せず。亦、姓に於て日下をば、玖沙訶と謂ひ、名に於て帯の字をば、多羅斯と謂ふ、如此ある類は、本の随に改めず。

と記していることが想起されよう。その読解は国学者に任せ、童話作家としては、

しかし、わたしはそういうことにこだわりなく、この本を書くことができました。一字一句については、あまりむずかしく考える必要がなかったからであります。わたしは書かれた事実と、その精神をつかむことに専念しました。そして、わたしなりにつかんだと考えることができたからであります。

と、「わたし」の神話理解を記すことに努めたとある（4）。神についての理解は、

ゆらい、人類以前は、どこでも神話をかたちづくっているようです。ギリシア神話などにも、「古事記」と共通する面が多々あるように思われるのです。人間の考えのおよばないこと、力たりないところは、神のあらわれによって解決づけられています。これは「神」が、当時の人たちの理想であり、夢であったからではないでしょうか。しかも、いずれも神とよばれながら、日本の神と、外国の神とのあいだには、変った

ところもないではありません。そういうことも、みなさんによく考えて
 いただきたいと、わたしは思っています。

と、「当時の人たちの理想であり、夢であったからではないでしょうか」と
 想像しているが、現在の理解については「皆さんによく考えていただきたい」と、
 課題を投げかけるに留まる。

このように、大木前掲①書と②書に示された執筆姿勢を読み比べてみる
 と、前掲①書は太平洋戦争に傾斜する時勢を含んで、

・世界の中でも日本はよい国であり、りっぱな国である。

・日本の神がそれを実現している。その先に建国の〈歴史〉がある。

・神話の時代から、大切にされてきた日本精神（よいこと＝国のため
 に尽力すること）に基づいて生きると、日本は世界の中でも強く、
 優れた国であり続けられる。

と志向されていた。作者はそれを、『日本書紀』をはじめ『古事記』や『風
 土記』から、「面白い、ためになるお話」を選択して童話化したとある。こ
 れが前掲②書になると、

・「わたし（作者）」個人の理解に基づいて、『古事記』のみを再話す
 る。

・『古事記』を《伝承説話》として読む。

・『古事記』に記された神は、当時の人たちにとつての「理想」であり
 「夢」であったと想像されるが、今日の理解は読者に委ねる。

と志向されている。戦後には、個人の理解に基づいた執筆が求められてゆく
 様子をうかがうことができる。

二、目次の比較

次いで目次から、大木前掲①書と②書を比較しておく。前掲①書は以下
 のとおりである。

国のはじめ

高天原／女神の死／黄泉国／素戔嗚尊

天岩屋

大神のお怒り／神々の集り／簸の川

八岐の大蛇

怪物の最後／Ⅰ天叢雲劍／Ⅱどうして木ができたか／Ⅲ国引き

大国主命

八十神／因幡の白兔／重い袋／悪だくみ

根堅国

蛇の部屋・百足の部屋／鏑矢と鼠／宇迦宮

神々の光

小さい神様／がまんくらべ／力くらべ／Ⅲ粟の穂／Ⅳ幸魂奇魂神

雉の使

天穗日命と天若日子／返し矢／雀の供物

国ゆづり

Ⅴ経津主命と武甕槌神／出雲大社

日の御子

三種の神器／猿田彦／木花咲耶姫

Ⅵ海幸・山幸

切られた釣針／目無籠／桂の木／潮満瓊・潮涸瓊／浜の産屋

東の国

東へ東へ／長髓彦／大熊／高倉下

八咫鳥

天照大神のおつげ／兄猾弟猾／勝祝ひ

金色の鵄

尾のある人間／天香山の土とり／八十梟帥と兄磯城／Ⅶ金鵄勳章

のいはれ

橿原の宮

饒速日命／日本よい国

「はしがき」には、『日本書紀』をはじめ、『古事記』や『風土記』をもとに物語が記されているとあった。例えば、波線で示した「天照大神」の表記には、「天照大御神」と記す『古事記』より、『日本書紀』が優先されている。内容は、『日本書紀』が記すままではないのだが、傍線部Ⅰ～Ⅴにも、『日本書紀』のみが記す表現と内容が認められる。対応すると思われる箇所を掲出すると次のようになる。

Ⅰ 卷一第八段正文

Ⅱ 卷一第八段一書第五

Ⅲ 卷一第八段一書第六 (『伯耆国風土記』「粟嶋」逸文)

Ⅳ 卷一第八段一書第六

Ⅴ 卷二第九段正文

Ⅵ 卷二第十段正文・一書第三

Ⅶ 卷三神武天皇即位前紀戊午年十二月

『日本書紀』が区別している正文と一書を、組み合わせることで物語を形成している様子が認められる。点線で記した「国引き」には『出雲国風土記』(意宇郡条)、「がまんくらべ」には『播磨国風土記』(神前郡「壱岡里」条)の応用等を確認することができる。

後掲する大木前掲②書の目次と比較すると、「東の国」以下に、初代神武天皇が橿原に都を開く建国までを記すところに特徴が認められる。神話が単なるお話ではなく、初代天皇の〈歴史〉にまで続いていることが意識されている。

特にⅦとした「金鵄」に留意すると、『日本書紀』(5)が、

十有二月の癸巳の朔にして丙申に、皇師遂に長髓彦を撃つ。連戦ひて取

勝つこと能はず。時に、忽然に天陰く雨氷る。乃ち金色の靈しき鵄有りて、飛来り皇弓の弭に止れり。其の鵄光り晡煜き、状流電の如し。是に由りて、長髓彦の軍卒、皆迷ひ眩えて復力戦はず。長髓は是邑の本の号なり。因りて亦以ちて人の名とす。皇軍の鵄の瑞を得るに及び、時人、仍りて鵄邑と号く。今し鳥見と云ふは、是訛れるなり。(以下略)

と記す内容が、「勲章」の由来に結びついて記されているところが注目されるよう。

「金鵄勲章」は、一八九〇年(明治二十三)二月十一日に交付された「勅令第十一号」(6)に、

朕惟ミルニ／神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ夙力ニ登極紀元ヲ算スレハ二千五百年ニ達セリ朕此期ニ際シ／天皇戡定ノ故事ニ徴シ金鵄勲章ヲ創設シ将来武功拔群ノ者ニ授与シ永ク／天皇ノ威烈ヲ光ニシ以テ其忠勇ヲ奨励セントス汝衆庶此旨ヲ体セヨ／明治二十三年二月十一日／奉勅 内閣総理大臣伯爵山縣有朋

と創設されている。その廃止は、一九四七年(昭和二十二)五月三日に施行された「日本国憲法」とともに施行された「内閣官制の廃止等に関する政令」(政令第四号)(7)第一条「左に掲げる勅令は、これを廃止する。」とある中に、「明治二十三年勅令第十一号(金鵄勲章の等級、製式及び佩用式の件)」を認めることができる。大木前掲①書は、この制度が機能する間に刊行されている。

「金鵄勲章のいはれ」の末尾が、

長髓彦がいくら強くても、金の鵄の光にはかなひません、家来どもは、弓矢を捨てて逃げ出しました。(前略) いまでは、手がらを立てた軍人に、金鵄勲章を下さいますが、金鵄勲章は、この時の金の鵄をおつけになつたものであります。

と記されているところから、社会的に模範とすべき制度として受け止められ

ていた様子がうかがわれよう。目次最後の「日本よい国」も、

御家来や人民は、大よろこびで、木をきつたり、土を運んだり、一生懸命にはたらいで、たちまち大きな立派な御殿をつくり上げました。これを橿原の宮と申します。

尊は、この橿原の宮で、天皇の御位におつきになりました。

式のあとで、それまで手柄のあつた御家来は、それぞれ大切な役目をおほせつけられたり、ご褒美をいただいたりしました。

この天皇を神武天皇と申し上げます。

と、国のために尽力することが、自らも豊かになれることを約束するものと記されている。時代と社会が理想とする在り方を反映して、神話が童話化されている様子を確認することができる。

これに対して、太平洋戦争後に刊行された大木前掲②書の目次は、以下のとおりである。

世界のはじめ

天岩屋

八またのおろち

いなばの白うさぎ

ねずみのてがら

小さい神さま

きじのおつかい

海さち山さち

大木前掲①書が記した「東の国」以降が、記されなくなっているところに大きな特徴が認められる。『古事記』そのものは、歴史として読むことが志向されている文献なのだ、歴史とは敢えて一線を画して、物語を想起させるような題名が用いられている。

「海さち山さち」の題名に留意すると、『日本書紀』第十段正文に、

兄火闌降命自づからに海幸有り、幸、此には左知と云ふ。弟彦火火出見尊自づからに山幸有り。

とあり、一書第三には、

一書に曰く、兄火酢芹命能く海幸を得。故、海幸彦と号す。弟彦火火出見尊能く山幸を得。故、山幸彦と号す。

と、名としての使用が認められる。大木前掲①書は、

瓊瓊杵尊の御子さまは、まもなく大きく立派になりました。いちばんお兄さま火闌降命は、海の漁をなさるのがお上手で、毎日たくさん魚を釣っていらつしやるので、海幸彦とお名前がつけました。末の彦火火出見尊は、山へお出かけになり、木の根、岩かどをお歩きになつて、獣や鳥をとつておいでになりました。それで山幸彦といふお名前と呼ばれるやうになりました。

と、「火闌降命」を「海幸彦」、「彦火火出見尊」を「山幸彦」と記している。用いられた神名から、『日本書紀』を念頭に再話している様子が認められる。これに対して大木前掲②書は

火遠理命は、かりがすきでありました。ゆみ矢をもって、まい日、山へでかけました。雨の日も、風の日も、みことはでかけていきました。けものや小鳥が、おもしろいほどたくさんとれて、いつもたいりようでありました。

そこで、人々は、みことのことを、山のさちひことよびました。山のさちひことある男といういみです。

みことには、にいさんがありました。火照命といって、海のりようがすきなにいさんでありました。にいさんは、まい日、つりざおをかついで、海へでかけます。にいさんは、つりがじょうずで、いつも、さかなをたくさんつりあげるので、人々は、海のさちひことよびました。海のさちひことある男といういみです。

と、神名が「火照命」と「火遠理命」に改められている。『古事記』の再話へと変更されているところに特徴が認められる。そのような中にも「海さち山さち」のような、『日本書紀』を想起させる題名が残されていることが注目される。これについては、作者の大正期に得た神話理解が影響すると述べたことがある(8)。明治期から大正期にかけて、日本の神話が文献から切り出されて、親しまれた時点の題名が定着していると見通される(9)。

三、本文の比較

最後に本文を考察しておく。大木前掲①書の冒頭は、次のように書きはじめている。

この世の中で、いちばんひろいものは何でせう。

空——。誰でもかういふにちがひありません。空はどこまでもつづいてゐて、おしまひといふところがありません。そのつぎにひろいものは地です。地はどこどころ海でとぎれてをりますが、それでも、とても一目で見渡すことなどはできません。山や川や、草や木なども地の上にあります。いろいろな生きものも、みんな地の上にあつて、ひろびろとしたところを自由にとんだりねたりしております。(以下略)

『日本書紀』卷一神代上の正文冒頭が、

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天に為り、重濁なる者は、淹滞りて地に為るに及びて、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。(以下略)

と記し、『古事記』上巻の冒頭が、

天地初めて発れし時に、高天原に成りし神の名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と成り坐して、身を隠しき。(以下略)

にはじまる部分と比較すると、出典に縛られることなく自由に執筆している様子がうかがわれる。大木前掲②書の冒頭も、

むかしむかし、高天原に、おおぜいの神さまがすんでいました。

そのころは、まだ、りく地というものがありませんでした。どちらを見ても、空と海だけで、あとはどろどろしたものばかりでありました。と、前掲①書ほどではないが、『古事記』の内容を自由に要約している。

解釈にも同様のことがいえる。例えばイザナギの神とイザナミの神がオノゴロ島に降り立ち国を生みはじめる部分を、大木前掲①書は、

(前略)とても丈夫におそだちになれさうもないから、御ふたりの神は、葦の葉でおこしらへになつた舟にのしておしまひになりました。

「弱い子ではいけない、強い子どもがほしい。」

男神がおつしやると、

「高天原の神にお伺ひしたらよいかと思ひます。」

と、女神がお答へになりました。

と、「強い子どもがほしい」と男神が言葉が発しているが、『日本書紀』第四段正文に該当する記事を見出すことはできない。同一書第一に、

遂に夫婦と為り、先づ蛭児を生みたまふ。便ち葦船に載せて流しやりき。

次に淡洲を生む。此も児の数に充れず。故、還復天に上り詣で、具に其の状を奏す。

とあるが、男神の発言は認められない。『古事記』には、

(前略)くみどに興して生みし子は、水蛭子。此の子は、葦船に入れて流し去りき。次に、淡島を生みき。是も亦、子の例には入れず。是に、二柱の神の議りて云はく、「今吾が生める子、良くあらず。猶天つ神の御所に白すべし。」といひて、即ち共に参る上り、天つ神の命を請ひき。

の如く「今吾が生める子、良くあらず」とあるが、「強い子どもがほしい」とまで積極的な記述を見出すことができない。あくまでも「二柱の神の議り

て」行われたこととしている。

これが大木前掲②書に至ると、

(前略) だいにそだてましたが、大きくなりません、いく日もたたないうちに、死んでしまいました。

女神は、かわいそうに、かわいそうにいつてなきました。男神もなきました。ふたりはなきながら、あしの葉で、かわいい小ぶねをつくりました。なくなつたあかんぼうを、そつと小ぶねにねかせて、川へながしてやりました。

「なぜ、あんなよわい子どもが、生まれたのでしょうか。わたしは、じょうぶな子どもがほしいのに。」

と、女神がいました。

「なぜかしら、わたしにもわからない。」

と、男神はかんがえこんでしまいました。

やがり、男神がいました。

「そうだ、高天原へいつて、わけをきいてこよう。」

「ええ、それがいいでしょう。わたしもいつしよにまいります。」

ふたりはつれあつて、高天原へいきました。

と、「じょうぶな子どもがほしい」と女神が発言したとされ、母親が子どもを思う気持ちから、健やかに成長することが願われている。求められる子どもは、強くあることより、健康が生まれ、夫婦の会話を多用した物語となっている。それぞれ出版された時代の理想とする社会が、映し出されているのであろう。

もう一カ所、大木前掲①の「大国主命」と前掲②書の「いなばの白うさぎ」

部分と比較しておく。『日本書紀』をはじめ『風土記』にも『古事記』

にも記されない内容に着目すると、大木前掲①書は、大国主命を、

(前略) 八十神はいつも命に用をお言いひつけになりますので、命はお

休みになる間もなくなりくらゐ、お働きになつていました。

と表現していることが留意される。大木前掲②書は同箇所を、

(前略) みことは、心のやさしい、はたらきものであります。にいさんは、それをいいことにして、みことにばかり、ようをいつけました。

「あれを、ここへ、もつてきておくれ。」

「でかけるよ、したくをたのむ。」

あのにいさんも、このにいさんも、こんなふうにいいつけました。みことは、いそがしくてたまりません。あつちへいつたり、こつちへいつたり、からだをやすめるひまありません。でも、けつしていやなかおをしませんでした。おとうとですもの、にいさんのようをするのはあたりまえです。みことは、そう思つて、よろこんではたらきました。

と、兄弟の關係をもつて話の内容を整合させている。

前掲①書に「命は、荷物を入れた大きな袋を肩にして、兄さまがたのあとからいつていらつしやいました。」とのみある記述を、前掲②書は、

「わたしも、つれていつてください。」

と、みことが、にいさんたちにたのみました。

「あはは、あはは。」

と、にいさんたちは、おかしそうにわらいました。

「おまえなんか、いつてもしかたがないよ。おひめさまは、おまえのおよめさんになんか、なりっこないよ。それでも、いきたいというならつれていこう。そのかわり、わたしたちのものもつをもつていくんだよ、おれにもつだよ、それでもいいかね。」

「はい、けつこうです。」

みことは、にっこりしてこたえました。にもつは、大きいおもいふくろです。みことは、おもいものになれているからへいきです。やつころさと、かたにかついで、にんさんたちのあとについていきました。

と、会話を多用し、労苦を厭わない大国主命を、献身的な存在として表現している。

そうした大国主命は、前掲①書のうさぎに、

「お前が鰐をだましたから、いけなかったのだ。これからは、ひとをだますやうなことをするのではないぞ。」

とおっしゃいました。

「はい、これからは正直にいたしますから、からだがもとのとほりになる法をお教へ下さい。」

と、改心を求めている。二重傍線で示したように、神の話が「ひと」への教訓を示すものとなっている。前掲②書のうさぎは、

に「皆さんたちは、うそをおしえて、うさぎを、からかったのでありましたが。うさぎにも、それがわかりました。」

けれども、うさぎは、に「皆さんたちを、うらみませんでした。みことに、その話をしたあとで、こういったのでありました。」

「わたしが、いけなかったのです。わたしは、わにをだましました。わにをだましたわたしが、人にだまされるのはあたりまえでしょう。人をおこることはできません。それを思うと、はずかしくて、かなしくて、なさけないのです。じぶんが、わるいことをしなかったら、こんなくろしいめにもあわずにすんだでしょうに。」

ぼろりぼろりと、なみだをながしていました。

「わかった、わかった、じぶんのわるいことに、気がついたのは、りっぱだよ。これからは、二どと、ずるいかんがえをおこさないことだね。」

「はい、もうこりごりです。けっして、ずるい心はおこしません。」

と自ら改心をし、ずるい考えをしないことを誓約している。これに大国主命は「それがいい、そのかわり、いいことをおしえてあげよう。」と救いの手を差しのべたとする。こちらでも二重傍線を施したように、神話が「人

への教訓を表している。

大木前掲①書が、うさぎの過ちを正して反省を促しているのに対し、前掲

②書は、過ちが報いをもたらすことを示し、自ら反省し行動を改めさせている。

大木前掲②書は、うさぎが大国主命に「おんは、けっしてわすれませんと述べ、

「あなたは、ほんとにいいかたです。おひめさまは、きつと、あなたの およめさんになりました。ええ、ほんとですとめ。あなたは、うそをおっしゃいませんでした。わたしも、うそはいいません。」

と、誠実に生きることがよい結果に結びつくことを強調する。

『古事記』には、以後にうさぎの登場する場面はないのだが、大木前掲②書は、その後も、うさぎが亡くなった大国主命を発見して母親に知らせる役目を繰り返している。大国主命が「スゼリヒメ」と結婚して、地上を平定するまでを一話と捉えられていたことを知ることができる。本稿では触れなかった前掲③書も、『いなばの白兔』と題して、

出雲の くには たのしい し／あわせな くにに なりました。／しろうさぎが いった とおり、／みことは くにじゅうの ひとび／とから、／「えらい おかただ。ありがたい／おかただ。」／と うやまわれました。

と、最後までうさぎが登場している。

大木「全集続出す」(10)は、同時期の出版事情を「原作は同一であっても、書く人によって相当なちがいがあがるものと思っている。そしてそれなりに、原作の味をはっきりさせられるなら、この種の出版の意義はある」と回想している。これは全集の刊行に限ることなく、大木前掲②書が刊行される意義をも示す内容となっていよう。古典作品を訳したというより、作者の理解する日本の神話を、時代の理想とする社会と重ね合わせて

童話化し続けている様子がうかがわれる。

おわりに

太平洋戦争前に刊行された大木前掲①書は、『日本書紀』をはじめ『古事記』『風土記』に記された内容を組み合わせ、日本の神話を童話化していた。大木「メンコの人気者」(11)は、

昭和十三年に、歴史童話として、はじめてのまとまった『日本神話』を書いた。そのころのある日新宿で童話作家協会のあつまりがあった。帰りの省線電車で、宇野浩二氏ととなり合わせた。

話を書きかけの『日本神話』にふれた時、
「三重吉にも、そんな本があつたじゃないですか。あれは、いかんですか」

と宇野氏がいった。

「いい本です。いままでのもののなかで、一番かもしれません」

宇野氏はちぼつとした口ひげをつきだすようにして言った。

「あなたが書くことじゃないですか」

瞬間、やられたと気がついた。

しかし、わたしは書いた。他人のした仕事を、も一どやってわるいというのではない。

と回想している。鈴木三重吉は従前の再話を厳しく批判して『古事記物語』を執筆したが、大木前掲①書にはそれが求められていないという(12)。複数の文献を組み合わせた物語が構想され、『日本神話』と名付けられた。初代神武天皇の東征までを記すことで「建国」につながる〈歴史〉が示されている(13)。国のために尽力することが求められ、強い国であることを理想とするが、他の国との戦争を肯定したり、支持するようなものにはなっていない。記される神々が、出典より心情豊かに表現され、人の世に重ね合わせ

やすい物語性を備えている。時代を強く反映する「金鶏勲章」は、「手らをたてた軍人」に贈られるものとあるが、それを得ることを奨励まではしてはいない。「金鶏」の由来が『日本書紀』の中にあることを紹介することに関心が向けられている。面白く時代の中でのためになる話を選ばれ、大らかに表現されているところに大きな特徴が認められる。

太平洋戦争後に刊行された大木前掲②書は、「わたし(作者)一人の理解に基づいて、『古事記』のみを再話していた。『古事記』を《伝承説話》と位置づけ、表現された神は、当時の人たちにとっての「理想」であり「夢」であったと想像する。ただし、今日においてどのような存在として認められるのかは読者に委ねられた。

大木「『金次郎』再登場」(14)は、その出版を、

昭和二十三年から二十六年にかけて、七冊の童話集を出すことができ
たわたしは、時に身のしあわせを感謝した。集団に属せず、ひとりに終
始するわたしにも、かくれた味方がいてくれたのである。

『むなきしうさぎ』『新しい童話二年生』『こびとのおどり』は幼年
童話で、『月夜の馬車』『星の子供』『花にかこまれた家』の三冊は、
しいていえば高学年向き。じつは、学年や年齢を意識におかないで書いた
作品ばかりである。

ほかには『二宮金次郎』と『日本神話』がある。戦前に書いたものを
土台にして、低学年向きに書き直したものだ。『二宮金次郎』を再び出
すについては、それだけの理由があった。(以下略)

と回想している。大木前掲①書と比較すると、前掲②書は漢字を平仮名に改
めている様子をうかがうことができる。低学年から読むことができるように
記しながら、内容も時代に合うよう書き改められている。神々が一層おら
かに表現され、ヒューマニズムに満ちた社会が、人間への教訓を含み込んで
理想的に表現されている。こうした内容が、『古事記』以前に存在した《伝

承説話』の世界と位置づけられている。

本稿では取り上げきれなかったが、大木前掲③書も、前掲②書と同じ構想に基づいて書かれている。ただし、絵本としての制約であろう、文章は前掲②書より簡潔に記されている。

いずれの作品も、出典となる古典作品を訳したというよりは、作者の理解する日本の神話を、時代が理想とする社会と重ね合わせて童話化したところに特徴が見出される(15)。

注

- (1) 大木雄二(一八九五「明治二八」—一九六三年「昭和三十八」)は、童話作家。『こども雑誌』等を編集。巖谷小波の還暦記念『童話三十六人集』に執筆。小林未明の還暦記念『現代童話四十三人集』に執筆。遺稿『童話を書いて四十年』自然社 一九六四年「昭和三十九年」に人生を振り返る記述がある。

(2) 大木前掲注(1)書『童話を書いて四十年』。

(3) 山口佳紀 神野志隆光 校注・訳者 新編日本古典文学全集『古事記』(一九九七年 小学館)をテキストに用いている。再話と比較しやすいように訓読文を使用した。

(4) 大木前掲注(2)書「全集続出す」は、昭和一九五一年「昭和二十六年」の全集出版事情を、

『世界少年少女文学全集』『世界伝記全集』『学年別幼年文学庫』『世界幼年文学全集』『世界童話名作集』『日本童話全集』『少年少女世界名作全集』これらが、それぞれの出版社から、大々的に送り出されたわけだ。どれも同じようだという人がいる。用紙の無駄遣いだともいう。だが簡単にそうもいきりない、読んだわけではないから、強いことはいえないが、原

作は同一であっても、書く人によって相当なちがいがあると思っている。そしてそれなりに、原作の味をはっきりさせられるなら、この種の出版の意義はある。

と記している。複数の全集を出版する意義を記すものだが、日本の神話が児童文学として再話される際にも、作者の理解や意図を反映することが求められていたことが知られる。

(5) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳 新編日本古典文学全集『日本書紀①』(一九九四年四月 小学館)をテキストに用いている。再話と比較しやすいように訓読文を使用した。

(6) e-Gov 法令検索 (<https://elaws.e-gov.go.jp>)

(7) 前掲注(6)に同じ。

(8) 市瀬雅之「『世界少年少女文学全集』「古事記物語」の位相—再話された日本の神話の考察—」(『梅花児童文学』第二十九号 梅花女子大学大学院児童文学会 二〇二二年三月)において、作者の大正期に得た神話理解が影響する可能性を述べた。

(9) 大木前掲注(2)書「童話の夜明け」は、

大正期のなごころ出ていた児童雑誌はすくなくない。博文館から『少年世界』『少女世界』『幼年世界』講談社から『少年俱樂部』『少女俱樂部』。実業之日本社からは『日本少年』と『少女の友』。時事新報社から『少年』『少女』。さらに『海国少年』『飛行少年』などもあったように記憶する。このうちの幾つかは、わたしが読者として親しんだものであった。これらの雑誌に執筆していた作家に、巖谷小波をはじめ、竹貫佳水氏とか星野水裏氏、宮崎一雨氏とかがあった。この時代の児童読み物について鈴木三重吉氏などは、かなり手きびしい批判を加えているが、わたしなどには、いままもそうした否定の気持ちは起

こらない。あれはあれでいいのではないかと思っている。

と記している。『海幸山幸』をタイトルにしている文献は、巖谷小波編の模範童話文庫に『海幸山幸』（文武堂 一九二六年〔大正十五〕八月）の刊行が認められる。これより早い例は、巖谷小波編『学校／家庭 教訓お伽噺（東洋之部）』（博文館 一九二二年〔明治四十五〕六月）の中に「海幸山幸」を見つけたことができる。

(10) 大木前掲注(4)に同じ。

(11) 大木前掲注(2)に同じ。

(12) 大木前掲注(9)に同じ。

(13) 喜田貞吉の日本児童文庫『日本歴史物語(上)』（アルス 一九二八年〔昭和三〕四月）が先に「山幸彦と海幸彦」と題し、

瓊瓊杵尊のお子の火闌降命は、『海幸彦』と申して、釣り針を以て海で魚をお捕りになる。又、その御弟の彦火火出見尊は、『山幸彦』と申して、弓矢をもつて山で鳥や獣をお獲りになる。

と、『日本書紀』を念頭に〈歴史〉として物語化している。

(14) 大木前掲注(2)に同じ。

(15) 大木前掲②書より後に刊行された林房雄の「古事記物語」（前掲注

(8)参照）は、神武東征までを記している点で、大木前掲①書に近い構成を持つ。作品には、時代と社会から受ける影響のほかに、作者の日本の神話に対する理解の差異が映し出される結果ともなっている。

※本稿の着想は、「絵本『いなばの白ウサギ』の謎』『開いてみよう古典の小箱』（勉誠出版刊二〇〇四年七月）にはじまる。今回は、その一部を述べたものである。